「日々の理科」（第 1262 号） 2017（H29),12,20

「ケヤキの不思議」

お茶の水女子大学附属小学校　田中　千尋

本校の校庭にはケヤキの木がある。日当たりが良く、他の木にも建物にも成長が邪魔されていないので、ケヤキ本来の樹容（自形）を呈している。

１２月中旬の今の時期は、葉をほとんど落とし、梢から少し幹寄りの枝に、わずかに葉が残るのみとなった。ケヤキは葉の落とし方が２種類ある。葉を一枚ずつ落とす方法と、枝ごと何枚か落とす方法である。

今朝、校庭のグリーンベルト（周縁部の全天候帯）を歩いていたら、その２つ目のタイプのケヤキの落ち葉を見つけた。場所は、当のケヤキの木から 30 メートルほど離れている。よく見ると、葉の付け根に、種子（正確には果実）がいくつかついている。単に枝についた葉が落ちているのなら、他の樹木と変わりない。しかし種子がついていることが重要なのだ。

これだけ離れたところに「葉と種子」が落ちている。これは、「風で運ばれた」以外に原因の選択肢はない。ケヤキは単に葉を落とすだけでなく、種子も一緒に落として、回転させながら空中を遠くまで飛ぶのだ。葉にしてみれば、落葉する一瞬の、「最後の一仕事」と言える。地面に落ちた「葉と種子」も、風で地上を回転しながら、更に遠くまで運ばれることもある。

ケヤキの葉は「互生」なので、左右交互についている。よく見ると葉は、螺旋階段のような付き方をして、その付け根に１つずつブドウの種のような種子をつけている。種子は「つの」があり、ゴツゴツしている。この形状にも、何か秘密がありそうだ。